

児童が理想の自分に近づくことを後押しするために教師ができること**—子どもに寄り添い、伴走し続ける道徳科の授業を通して—**

年度当初に児童が「理想の自分」として設定した目標を達成するために、道徳教材を選定するなどして指導の重点化を図ったり、個々の児童の想いに寄り添いながら繰り返し面談したりすることなどを通して、児童が自己実現を図ることを目指して実践した。

1 実践の具体**① 実現のための具体的方策**

子どもたち一人ひとりに寄り添い伴走し続けるためには①児童に理想像をもたせ、②学びを促す教材を準備して授業を行い、③児童が学んだことを生かせるように、授業後も教師が意図的に関わり、④変容を評価し、振り返りを促すという4つの過程が必要だと仮説を立て実践した。

② 一人ひとりの理想に対応した学びを実現するために

子どもたちの理想を明確化するためにアンケートを取り、それを基に一人ひとりと個別に面談を行った結果、7種類の理想グループに分かれた。そこで、7種類の理想に対応できる7つの教材を用意するとともに、個の重視する対話の仕方を選択する場を用意することで、児童一人ひとりが自己の成長を実感できるとともに、その成長を教師も児童と共に喜び合うことができた。

2 実践の成果と今後の方向性

「①理想像を明確にもたせる」過程を大切にすることで、児童がしたいことや考えていることが明確になった。それに合わせて、教材選択や学び方を工夫することで、主体的な学びにつながった。さらに道徳科での学びと実際の生活場面を結びつけて考える機会も多くなり、児童は自己の成長をより強く感じられていた。

しかし、一人ひとりに寄り添うことには、多くの時間と労力を要する。今後は、実態把握をいかに効率的に行うかを考えるとともに、発達段階に応じて、どのように気づきを促し授業をつくっていくべきなのかについて、さらに探っていきたい。